

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 8 日現在

機関番号：10102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25381230

研究課題名(和文) 思考・判断・表現力の育成を目指す小学校音楽科の教材開発

研究課題名(英文) Development of teaching materials of an elementary school music course aiming at google consideration, a judgement and upbringing of the expressive power

研究代表者

尾藤 弥生 (Bitoh, Yayoi)

北海道教育大学・教育学部・教授

研究者番号：20322860

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：小学校音楽科の授業で、思考力・判断力・表現力の育成を目指す「音楽づくり教材」の開発を行った。ここでは、難しい作曲のルールを知らない初心者の子供でも、すぐに作り方の説明を受けて音楽づくりできる教材の開発を行った。その結果、実践により、学習者が作る過程において、思考・判断をフル活用しつつ、音楽づくりを楽しみながら学習でき、自らすぐに表現できることが明らかになった。また、評価規準・基準も明確に示したことにより、現場ですぐに活用できることが大いに期待される教材になったといえる。

研究成果の概要(英文)："Creative Music-making Teaching materials " have been developed aiming at upbringing of the thinking power, judgement and the expressive power at the session of an elementary school music course. Even the beginner's child who doesn't know a rule of difficult composition will have the explanation of how to make immediately here, and, music making, can, teaching materials have been developed. It became clear that it can be learned while enjoying music making, making full use of thought and a judgement in the practiced result and the process a learner makes, also it became clear that it can be expressed immediately personally. It was the teaching materials expected very much to be able to utilize immediately at a site by the thing an evaluation criterion and a par also indicated clearly.

研究分野：音楽教育学

キーワード：音楽科教育 創作教育 問題解決学習 探究学習 音楽づくり 思考・判断・表現力 実践学

1. 研究開始当初の背景

なぜ、思考・判断・表現力が必要になるのか。21世紀は、科学技術をはじめ様々な社会の仕組みの変化のスピードが著しく加速しており、年単位、月単位で新しい知識や技術が要求され、過去の知識や習慣では対処できない対応を迫られることとなる。つまり、知識創造社会の時代に入っているため、創造的な知的能力が求められることとなる。そこでは、アイデアを考えだしたり、未知の状況での判断を迫られたりする。従って創造的な解決能力が求められる。これらを実現するためには、必然的に思考力と判断力が求められ、自らの考えを発信する表現力も必要となる。

このことは、学校教育法第30条第2項にも述べられ、学習指導要領でも全教科での実現が求められている。また、持続可能な発展のための教育 ESD (Education Sustainable Development) においても、これらに関わる能力の育成が求められている。

ESDにおいては、国連の「持続可能な開発のための教育の10年実施計画」(2006)を基に、ESD-J2006 日本版において育みたい力として、次の10点を示している⁽¹⁾。

自分で感じ考える力、問題の本質を見抜く力、問題の本質を批判する思考力、気持ちや考えを表現する力、多様な価値観を認め尊重する力、他社と協力して物事を進める力、やり方から作り直す力、

自分の望む社会を思い描く力、地域、国、地球の環境容量を理解する力、自ら実践する力、である。これらを実現するためにも思考・判断・表現力は大変重要となる。

小学校学習指導要領音楽のA表現(3)「音楽づくり」ではどうであろうか。まず、創作領域の「音楽づくり」は「児童が自らの感性や創造性を発揮しながら自分にとっ

て価値のある音や音楽を作ること」と定義されている。これらの実現のためには、自らで思考・判断・表現することが求められる。

これらの知識創造社会、学習指導要領及びESDの求める能力は、創造性と深く関わる。ここでは創造性を「自己実現の創造性」としてとらえ、恩田彰⁽²⁾、マズロー⁽³⁾、ヴァン・ファンジュ⁽⁴⁾、情報論⁽⁵⁾の考え方を総合的に検討すると、創造性とは、アイデアをつくりだす能力で、既存の素材を分解して、新たに創造者の考える組み合わせで、結合したり構築したりして新たな考え、モノ、作品を作ること、と言える。従って、創造性にも、思考・判断・表現力が求められる。

以上の思考・判断・表現力の育成の立場から、これまでの筆者の研究との関わりを考える。筆者は長年創作及び音楽づくり(小中学校の学習指導要領ではこのように記載されている)の教材開発及び指導方法⁽⁶⁾の実践・研究を行ってきた。それは、学習者が創作テーマに沿って自ら新しい作品を作り出す学習活動であるため、思考・判断・表現力が必然的に求められると実感してきた。

これらのことから、本研究テーマを設定した。

注

(1)角屋重樹他 2012『学校における持続可能な発展のための教育(ESD)に関する研究』国立教育政策研究所 教育課程研究センター p.7

(2)恩田彰 1980『創造性開発の研究』恒星社厚生閣 p.3.92.

(3)(2)に同じ p.3

(4)(2)に同じ p.25

(5)(2)に同じ p.25

(6)尾藤弥生 1983「現代音楽の鑑賞をめぐってー創作指導からのアプローチー」音楽教育 No.89,全日本音楽教育研究会会誌, pp.12-22. 尾藤弥生 1984「創造的音楽学習における教材論の展開」季

刊音楽教育研究第 41 号 音楽之友社、pp.88-92。
尾藤弥生 1991「「つくって表現する」活動の意義」
季刊音楽教育研究第 67 号 音楽之友社、pp.48-52。
尾藤弥生 1992「創造的な音づくりの実践「つくって表現しよう」より「沈黙を意識するー耳慣れた音楽との接点を考慮しての指導」教育音楽別冊音楽之友社 pp.125-128。尾藤弥生 1997「五線譜が苦手でもできる KOTO による創作活動」教育音楽中学・高校版 12 月号 音楽之友社 pp.62-63。
尾藤弥生 1999「日本音楽の指導と学習 高等学校における箏を用いた「つくる」活動」学校音楽教育研究 Vol.3 日本学校音楽教育研究会 pp.40-43。
尾藤弥生 2006「創作活動における箏活用の有効性に関する一考察」北海道教育大学紀要教育科学編第 56 巻第 2 号 pp.149-159。

2. 研究の目的

本研究の目的は、音楽科の授業で、今日の教育で育成する力として求められる思考力、判断力、表現力を育成するための小学校音楽科の教材を開発することである。特に、小学校音楽科の表現・創作領域(音楽づくり)に焦点を当て、実践教材の開発・検証を行い、最終的に実践のための事例集やガイドラインを作成して教育現場に提供することを目指した。まず、これらの力がどのような価値があるのか、なぜ必要なのかを、学習指導要領の視点、ESD(持続可能な発展教育)の実現を目指す視点、創造性育成の視点などから明らかにする。次に、その意義の視点から、学習できる実践教材を開発し、実践を通してその効果を検証し、その結果に基づき改善、検証を繰り返し、最終的な教材を提示する。

3. 研究の方法

1 年目は、理論的研究のため、文献を中心とした研究を行った。学校教育、学習指導要領で求められる思考・判断・表現力と ESD 教育で求めるこれらの能力の関係性や共通点を明らかにする。次に文献などから、創造性との関係から、「創

造」は人間の本源的な心的活動で人を人、たらしめる条件であると言われるように、人間の教育での価値を明らかにする。そして、育成すべき力に基づき、どのような創作に関わる教材がふさわしいか、提示方法、指導方法に関して、研究協力者を交えて検討した。

2 年目は、仮説に基づき実践的方法で研究を行った。仮説に基づいた開発教材を試実践し、結果の分析から問題点を導き出し再検討した。

3 年目は、改善案を実践し検証を行うとともに、現場での活用を考え、評価規準・基準を明確に設定して、さらに試実践を行った。後半には、現場で活用できることを踏まえて、事例集や活用ガイドラインを作成した。

4. 研究成果

開発した「音楽づくり教材」が、学習において、学習者が課題設定できる教材、学習者が作品の仕上がりを予測できる教材、イメージや想像力をはたらかせやすい教材、学習者が分析、総合の学習活動を繰り返すことのできる教材、教材から多様な推理や思考、判断ができる教材、鑑賞者が作品を理解しやすい教材、であるなどが明らかになった。

つまり、学習者が思考・判断・表現力を育成できる教材であることがわかった。

さらに、学習時における評価の観点や評価規準・基準を、他教科との関連性も勘案して明確に提示することで、小学校の指導者が評価規準・基準を意識しつつ指導できること、それにより児童の思考・判断の学習が深まることが明らかになった。このような評価規準・評価基準を設定することで、音楽の指導を苦手とする教員や指導初心者でも明確で具体的な支援ができることが明らかになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 6 件)

- 1.尾藤弥生 「音楽づくりにおける思考・判断・表現力の育成に関する考察 評価規準・評価基準をてがかりとして」『学校音楽教育研究』Vol.20, pp.122-123, 2016, 査読無
- 2.尾藤弥生 「ハンドベルによる「音楽づくり教材」の考察 思考・判断・表現力を視点として」『学校音楽教育研究』Vol.19, pp.198-199, 2015, 査読無
- 3.尾藤弥生 「思考力・判断力・表現力を伴った日本の音文化理解の学習効果の考察 箏二重奏曲「丹頂鶴 誕生そして旅立ち」の楽曲を通して」『芸術・スポーツ文化学研究』pp.121-137, 2015, 大学教育出版, 査読有
- 4.尾藤弥生 「思考力・判断力・表現力を育成するための「音楽づくり教材」開発視点の探究 小学校音楽科の教材開発を目指して」『北海道教育大学紀要(教育科学編)』第65巻 第1号, pp.175-186, 2014, 査読無
- 5.尾藤弥生 「「音楽づくり教材」の思考力・判断力・表現力に関する考察 小学校音楽科の教材開発を目指して」『学校音楽教育研究』Vol.18, pp.131-132, 2014, 査読無
- 6.尾藤弥生 「「声」を素材とする創作活動の学習過程 思考・判断・表現を視点として」『学校音楽教育研究』Vol.17, pp.241-242, 2013, 査読無

〔学会発表〕(計 4 件)

- 1.尾藤弥生 「音楽づくりにおける思考・判断・表現力の育成に関する考察 評価規準・評価基準をてがかりとして」日本学校音楽教育実践学会第20回全国大会 大阪成蹊大学 p.85, 2015
- 2.尾藤弥生 「思考力・判断力・表現力を伴った日本の音文化理解の学習効果の考察 箏二重奏曲「丹頂鶴 誕生そして旅立ち」

の楽曲を通して」日本音楽教育学会平成26年度北海道支部例会 北海道教育大学旭川校 2014

3.尾藤弥生 「ハンドベルによる「音楽づくり教材」の考察 思考・判断・表現力を視点として」日本学校音楽教育実践学会第19回全国大会 熊本大学 p.30, 2014

4.尾藤弥生 「「音楽づくり教材」の思考力・判断力・表現力に関する考察 小学校音楽科の教材開発を目指して」日本学校音楽教育実践学会第18回全国大会 お茶の水女子大学 p.31, 2013

6. 研究組織

(1)研究代表者 尾藤 弥生(Bito, Yayoi)
北海道教育大学 教育学部 教授
研究者番号 20322860